

# 緑が「ご縁」の人とまち ～地域コミュニティ再生への挑戦～

まちなか緑化インストラクター 室井泰子（目黒区）

公益財団法人 東京都公園協会では、都市緑化を推進するために、公園・街路樹等の公共の緑と連携した民有地における緑の創出をテーマとしたモデル事業として、2008年度より「まちなか緑化活動支援事業」を進めています。この事業の特色は単に緑を増やすというハード面だけの緑化事業ではありません。緑を介して地域の環境作りにおける主体的に活動を継続できる担い手を創出し、連鎖させることで広げ、コミュニティ価値を育む土壌をつくります。まさにコミュニティの再生を視野に入れた事業です。



## 最初のモデル地区は久我山（杉並区）と浅草（台東区）

この二つの地域はどちらも商店街ですが、それぞれに特徴があります。久我山は「昔は農業地だった土地に近代化の波がやってきた街」一方、浅草は「江戸の下町、町人のまち」です。私は何度か足を運んだことのある浅草に参加することにしました。



普段は店先に置き「看板」の役目を果たす「緑の可動式プランター」は「緑の環境デザイン賞」国土交通大臣賞を受賞

まずは、その土地の成り立ちや歴史的な背景、移り変わりなどを把握します。

昔の街並みと今の街並みの相違点や人の流れなどがわかると、何かが見え始めます。そして、ファシリテータや植栽デザイナー、インストラクターは街の雰囲気をつかむと同時にその地域の住人に緑の大切さをオリジナルのグッズを用いた実験で「体感」してもらう作業に入ります。知識より体感が重要な要素となり、緑に対して人々の気持ちが揺り動かされます。

## 少し前のこの地域はどんな街だった？

自分自身の記憶の中や隣人の発言から、住人たちはこの道はかつてこうだった、ああだった、こんな人との会話もあった、そう言えば最近近所の人とも顔を合わせなくなった、さびしいなど様々な気持ちがよぎります。「便利になること＝人間関係の希薄」、近所との付き合いは面倒だという気持ちでいるより「コミュニティを再生し、活かす＝個人の得になる」のだ

ということを理解します。最終的な緑を取り入れるデザインは街の特徴や住人の意思で決定します。この事業の特徴は単に緑を増やすのではなく、この住民おしこのやり取りというステップが大切なのです。

## 自分の夢や希望を語る ～ワークショップ～

公園協会や自治体からの呼びかけにより集まった人の家の写真や隣近所の写真などを用意し、1軒に一人のまちなか緑化インストラクターがついて、ご近所ごとにテーブルに集まります。テーブルごとにファシリテータも配置され、いよいよ聞き取り調査の開始です。1対1で、自分の家の植栽をどのようにしたいのか、まずはじっくり住人の思いや希望を聞いていきます。短い時間でも1対1で話を聞いてもらった充足感に満たされます。住人には、自分の思いや希望を自由に語ってもらいます。そして、インストラクターは住民の言葉を一つひとつ用紙に書き込んでいきますが、同時に近隣の人たちの話す内容も漏れ聞こえてきます。この漏れ聞こえることにも意味があります。

## 自分の利益が地域の利益に

ファシリテータの誘導で、同じテーブルの近隣の人たちに住民と担当インストラクターと一緒に発表します。その時に今まで自分の利益を語っていた住民は、漏れ聞こえてきた隣人の気持ちをいつの間にか汲み取り、自分自身のことだけでなくこの地域をどのように



江戸情緒あふれる「緑の拠点」お休み処には川柳の受付ポストもあります